

## 平和へのメッセージ

この度は、上田市戦没者追悼式にお招きいただき、誠にありがとうございます。このような場でスピーチの機会いただけること、幸甚に存じます。1945年に太平洋戦争の終戦を迎え、私たちの国は大きく変わりました。軍国主義により、国民の尊い命が失われたことを深く反省し、決して同じ惨禍を繰り返さないよう、日本国憲法において恒久平和の実現が掲げられたのです。

あれから月日は流れ、来年は戦後80年となる節目の年です。終戦時にこの世に誕生された方が80歳となり、実際に戦地に行かれた方や戦争を色濃く記憶されている方は、更に高齢となっています。戦争を本当の意味で知っている方と直接お会いし、お話をお聴きすることが困難になっていく中で、どうやって人々の心の中に戦争の歴史を残していくかということは、喫緊の課題であり、非常に重要なテーマではないでしょうか。

朝、目が覚めて学校に行き、友達と笑い合い、夜は温かい布団で安心して眠ることができる。そんな当たり前の日常が、かつては決して当たり前ではなかったこと。命の重みが軽んじられ、国のために命を捧げることを当然としてきた過去があったこと。それらを今一度振り返り、どのような犠牲の上に今日の平和が保たれるようになったのかについて、思いを馳せるべきだと考えます。本日は、そのような気持ちでここに立たせていただきました。

さて、少し視点を外に向けてみますと、昨今の世界情勢では、ロシアによるウクライナ侵攻やイスラエルとパレスチナの問題などが連日メディアで取り上げられています。これらの報道に関心を寄せ、動向を見守っている人も少なくないのではないのでしょうか。しかし、私たちの多くは、自国の平和のすぐ外側で、罪のない人々の命が踏みにじられている現実を知っても、憤りこそ感じますが、それだけに終始しがちです。やはり、どこか他人事で、いつか自らも同じ境遇に陥るかもしれないとまで考慮するのは難しいのではないのでしょうか。とりわけ、私も含めて若い世代になるほどその傾向は顕著かもしれません。

というのも、戦争体験者と比較的年代が近い方は、親族内や近所、職場等の身近な所で、リアルな戦争についての話を耳にすることがあったのではないのでしょうか。ところが、世代が進むにつれ、戦争体験者との交流の機会は希薄になり、戦争をはるか昔の遠い出来事のように感じやすくなるのです。若者にとって、日本が戦争をしていた時代があったことは、教科書の中にある歴史の1つとしては知っていても、自分とは関係の無いこととして切り離して考えがちです。日本が再び戦争を始める可能性を想像することは容易ではなく、世界の不穏な状況に対してもまるで対岸の火事のように捉えている人が少なくないはずで、もちろん、私もその1人でした。

そんな私でしたが、大学 3 年生の春に、上田市と太平洋戦争について研究していた山浦ゼミに入ったことがきっかけで、戦争に対する見方・考え方に変化が生まれました。ゼミの活動を通して、上田市に残る戦争遺跡を実際に訪れたことで、身近な所にも戦争の痕跡がたくさんあることに気がついたのです。なかでも、ひときわ印象に残っているのは、松脂の採取跡です。長野大学のすぐ側にある東山に、矢羽根型の傷跡がついた松が数本残っています。それらは、戦時下の燃料不足を補うため、松の油で戦闘機を飛ばそうという計画の下につけられたものでした。切り刻まれた跡を塞ごうと木の皮が盛り上がっている姿が痛々しく、今もなお出続けている松脂を見ていると、人間によって理不尽に傷つけられた松の声なき声が聞こえてくるようでした。戦争が奪うものは人の命だけではない、戦争は最大の自然破壊なのだ実感した瞬間でした。

また、戦争体験を持つ方へのヒアリング調査を進めていく過程では、いくつもの心揺さぶられるエピソードに出会いました。「正しい戦争はありえない」、これはインタビュー当時、93 歳だった方がおっしゃられた言葉です。「例え、どんな理由があったにしろ、戦争をすれば多くの人々が傷つき悲しむことになる。勝っても負けても、犠牲になるのは国民であり、終戦後も一生消えない傷を両者が負うことになる。」と続けられました。人類が築いてきた科学の力を人殺しの道具に使ってしまう戦争は、本当に愚かなこと。力は、何のために使うのか、今一度考えなければいけないというメッセージを頂き、私の心に今でも深く刺さっています。

死が隣り合わせの時代を生き抜いた方のお話は、時に恐ろしく、時に生々しく、それでいて 1 つ 1 つの言葉に熱量がこもっています。ひとたび、自身の経験を話し出されると、どの方も年齢を感じさせないほどの、力強い言葉と真剣な眼差しで語ってくださり、いかに自分の見てきたものを伝えたいと願っていたのかが分かりました。人生の先輩方が過ごした壮絶な青春時代について、生の声を通してきけるのは正に今だけです。私たちが直接語り継いでもらえる最後の世代だということを改めて意識し、自分たちは知るだけで終わらせず、次の世代に伝えていきたいという気持ちが芽生えました。そうした経緯で、昨年は地域の小・中学校、高校へ赴き、学んだことを語り継ぐ活動もさせていただきました。子どもたちの前で授業をするという経験はありませんでしたが、戦争を少しでも自分事として感じてもらえることを目指して行いました。

今年度からは、大学の都合でゼミが閉講になりましたが、未来を担う若者が戦争について知ろうとしなければ、戦争の記憶は途絶えてしまいます。戦争に興味をもちにくい人が多い中で、自分たちまで悲惨な過去から目を背むけ、歴史を風化させてしまえば、再び同じ過ちを繰り返すことに繋がってしまう。そのような思いから、平和教育を意味する Peace Edu というサークルをたちあげ、人々の心に平和の灯りをともし活動が続けています。

私たちが、普段何気なく過ごしている日々の中には、戦争の歴史を後世へ伝えたいと願っている、「モノ」・「ヒト」が存在します。身の回りにある戦争の記憶と痕跡を受け継ぎ、この先へ繋

げていくことは、未来を生きる私たち若者の責任です。これまで先輩方が築き上げてきた平和の礎を、今度は我々が守っていく番です。もう二度と、理不尽に笑顔と自由が奪われないよう、平穏な幸せを享受できる社会の実現に向けて、努力し続けることを誓います。

令和6年11月7日

長野大学社会福祉学部4年 栗林果穂